

# 文化



ミケランジェロ「天体の創造」(部分) 森村泰昌編著「手の美術史」より

## 手の雄弁術への卓抜なるチチェローネ(案内人)

### 森村泰昌「手の美術史」をめぐって

西洋美術を、「手」の表現の変遷から読み解いた「手の美術史」を美術家の森村泰昌さんが刊行した。二百もの名画を素材に、変幻する「手」の秘密に迫った異色作を、美術史家の稲賀繁美さんに解説してもらった。

「大芸術家たちは手の研究に一通りではない苦心を払っていた」(杉本秀太郎訳)。私の美術史家アンリ・フォンソンの「手を讀んで」のこの言

「手の不可思議さと危うさの秘密を知った。レオナルド・ダ・ヴィンチ《最後の晩餐》の二十六本の手は、食卓の上

手を道具とする画家は、手に精神が宿り、手が精神を作る」ことをよく弁えていた。

人類史を遡ろう。二足歩行は人類の手を体の運搬から解放し、自由になった手によって、口は物を運ぶ労働から解放され、かくして口は言語を獲得した。だが、都市化とともに、手もまた労働から解放される。暇をかこった手は「貴族に成り上がる」。手は口と競合して、恋愛の手練手管に磨きをかける。ルネサンス以来、生きる喜びを表明してきた手は、十九世紀も末を迎えると、退廃を宿した耽美な表情に染まる。そして二十世紀の機械文明は「手の解体」を招いた。松田和子の「シユルレアリズムと(手)」(水声社、二〇〇六年)

### 稲賀繁美

葉に『手の美術史』は確たる物証を与えている。森村泰昌は、泰西名画の登場人物に自ら擬態し、変装した肖像ポートレイトを撮ってきた。切断されたホロフェルネスの首を手にするユーディットを演じ、エドゥアール・マネ《オランピア》の左手の指の仕草を模倣する。名画の成り立ちを生身で追体験してきた森村は、今まで世間の誰も気付かずにいた、画中の

いなが・しげみ氏 国際日本文化研究センター教授(比較文化)。著書に「絵画の東方」「絵画の黄昏(たそがれ)」など。

「手の美術史」は、森村泰昌の「手の美術史」をめぐって、森村泰昌は、泰西名画の登場人物に自ら擬態し、変装した肖像ポートレイトを撮ってきた。切断されたホロフェルネスの首を手にするユーディットを演じ、エドゥアール・マネ《オランピア》の左手の指の仕草を模倣する。名画の成り立ちを生身で追体験してきた森村は、今まで世間の誰も気付かずにいた、画中の

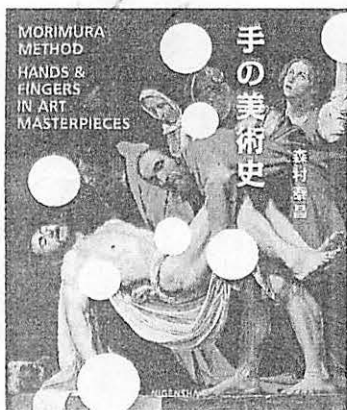
手には口も目もない。それなのに手はものを見え、口を凌駕するほど雄弁に語り、人を説得する。先史時代の洞窟には手型の輪郭が描かれたが、その指の痕跡にジャクソン・ポロックが感応したのは一九六〇年代。幼年期より記憶の底に淀んできた形象が、抑圧から解放され、意識の表層に再浮上する。その懐かし

者に喚起する。

「魂とは手のようなもの」と語ったのは『靈魂論』のアリストテレス。Morimura Methodは、この「魂」の生感を、泰西絵画史を縦横に辿りつつ、照らしだす。二百に及ぶ「手」

を招き寄せて。《モノリザ》の両手は、本書の最後を飾る森村作品を見た時には、すでに大きく変貌を遂げているはずだ。

◇ 「手の美術史」は二(女社刊)



「手の美術史」